

読売歌壇



小池 光選

歩み初めし児のやはらかな土踏まず四十億年の
はるかなる旅
横濱市 古山 智子

【評】地球に生命が誕生して四十億年。こ
まで来るのは、実にはるかな旅であった。歩
き始めた幼子の足に、生命の来歴を思っ。ス
ケールが大きな秀作。

父おどけそれ見えて笑う母言はれは続く介護も何の
これしき
神奈川県 河合 潤子

【評】父が冗談を言い、母が笑う。介護の日
々は辛い、その笑いに救われる。「何のこ
れしき」が力強い。老いたる父も母も、そし
て介護する娘も、みんな立派だと思ふ。

ひらがなを初めて覚え書きし文字「しろうろは
しれ」そして「むらさぎ」平塚市 村杉 晴次

【評】はじめて字を書いたときの思い出。「し
ろうろはしれ」と書いて、それから自分の名
字を書いた。書けて、うれしかった。

母の古い丸ごと背負った月日過ぎ気づけば我も
冬の細道
松山市 高橋 幸子

一度のみ書きし恋文古稀過ぎし今も忘れぬ高山
和子
笠間市 小沢まさみ

残された君の遺品が泣いてゐるどうしてほしい
か我にもわからぬ
深谷市 村田 利雄
進るゆまりは深雪を穿ちたり十八キロの犬の
生きたま
札幌市 三浦公佐子
馬頭琴を草原の風と聴きしよりモンゴルに私は
行くことにした
会津若松市 佐藤 秀子
三度目のがんの疑い晴れた日にふと思ひ立つ父
しのぶ旅
横濱市 桃井 恒和
かまくらの如き暮らして一米八十糶の雪にを
ののく
青森市 安田 溪子

栗木 京子選

瀬戸内の小島に暮らす孫の背にし蜜柑を売る
京子
長岡京市 みつきみすず

【評】この選は京都在住の知人、あるいは
作者自身か。孫が瀬戸内の島で育てた蜜柑を
祖母が京都で売る。その連携がすばらしい。
蜜柑の黄色が場面を明るさを添えている。

又毛用紙に短歌の一言ちらばりていつか出合え
ば一首になりぬ
川崎市 渡部シゲ子

【評】短歌になる前の断片の言葉が又毛用紙
に書き付けられている。それらがいつか出合
って一首になると思うと、心が弾む。作歌に
対する努力と愛情をこの歌から感じた。

中華街雪に売り子と目があえば「肉まん、どう」
と聞く蒸籠よ
長崎市 鷲 直巳

【評】雪の降る中華街。店先の蒸籠から湯気
が上がっている。これはもう買わずにいられ
ない。売り子と目があったのが楽しい。

「だるまさんころんだ」のごと戦争は振り向く
たびに近付きており
狭山市 奥蘭 道昭

一人で暮らす米寿の姉はいかにおます果物贈る
弟も傘寿
東京都 青山 繁
庭の梅つぼみそらうて咲きはじめ今なお病める
われに春来ぬ
たつの市 七條 章子
川面には白鷺がいて鴨がいて川底撫でる重機が
ひとつ
西宮市 森 英明

雪の朝ウサギの足跡ほつほつと行ったり来たり
コナラの木
東京都 網野 空音
むつきとか粥の種類が増えてゆく町の商店頼も
しきかな
大阪府 木村由里亜

俵 万智選

一字一字毛筆よりも丁寧な祖母がLINEを返
してくれた
大和郡山市 大津 穂波

【評】慣れないLINEを、孫とのコミュニ
ケーションのために、おぼつかない手で打つ
様子が目に浮かぶ。それをとらえた上の句に、
受けとる側の愛情もにじむ。毛筆が、祖母と
の縁語のように効いているところも魅力だ。

絵日記にみどりのパンダ ああ頃は正しいより
も好きで生きてた
横浜市 富尾 大地

【評】みどりのパンダが、のびのびしていた
時代を象徴して印象深い。「ああ頃」への哀
惜が伝わってくる。

子を宿しいわさきちひろを好きになる母とおん
なじ絵を好きになる
武蔵野市 谷口 菜月

【評】愛らしい子どもを多く描きたいわさき
ちひろ。「好きになる」のフレーズが、子
守歌のように優しく響いてくる。

屋さがりバサッと君を抱くように干したシャツ
を取り込んでおり
東京都 富見井高志

こんなにも優しい人がこんなにも優しくなった
わけを思った
東京都 鳥さんの臉
やわらかな雪解け水を抱えている学級閉鎖明け
の教室
宇部市 常田 瑛子
病院の明るすぎる待合室に流れるラジオの早押
しクイズ
横濱市 紺屋小町

昨夜食みし蜜柑のように甘やかな朝焼け雲が流
れてゆけり
仙台市 小野寺寿子
節分の東の空の薄雲をスマホから目を離して見
よう
大津市 佐々木敦史
プレゼンの準備不足の原因は時間がたつぶりあ
ったせいかも
大阪市 原 拓

黒瀬 珂瀾選

病床の金魚の鉢に一匹を補充す母に気付かれぬ
やう
対馬市 神宮 斉之

【評】母が気を落とすことのないように、死
んだ金魚をこっそり差し替える。「死」に對し
て鋭敏になった家族の状況を伝える歌です。
最下位のランナーがなお一秒を縮めんとする歯
を食いしばり
春日部市 宮代 康志

【評】随分と距離が開いた。もう順位が上
がることもない。でも、一秒でも早くゴールに
着きたい。そんなアスリート魂が印象深い。
士偶とは違う女の生き方で動く草薙素子の義体
を
石川県 青い

【評】『攻殻機動隊』の草薙素子は全身義体
のサイボーグ。その生き方は破天荒だ。では、
現実の私はどうか。生来の肉体を持ちながら
も、誰かに操られる士偶のように生きていな
いか。アニメを通して「私」を顧みる一首。

外国の出稼ぎ兵士を雇い入れ前線に送る死ねと
ばかりに
富岡市 木許 裕夫

嫌はるる勇氣は既に持ちてをり好かるる趣味を
無理に持ち得ず
立川市 安藤 麗

恐竜が驚くほどの恋をしたあとの我らは滅びる
だけだ
奈良市 浦城 亮祐

四万十の源流地から吐き出され寒九の水や海目
指しゆく
須崎市 野中 泰佑

オオイヌノフグリといふ名を繰返し言つて幼は
春を覚える
安中市 田口 明子
いいじゃない陽キャの息子爆誕すママと呼ばれ
る娘の夫に
仙台市 菊地 康子
建て付けの悪き引き戸を思い切り引けば怒った
よつな音たつ
鯖江市 伊藤 敏晴